



北都方

寒燈夜話 小栗外傳 卷之十

東都

絳山戲編

第十七編

妬婦忿死して妖祟と為す
名馬苦辛して孤忠と為す

秋 13
204
12

東都

斯く美登小を郎の爺見万平が後殿を慕ひて走りぬる所荒川の辺にて
退行む其時小太郎声を揚げ人々暫し止り経り之き半のあけふこそこ
味かけりうの万平の愕然としてありて美登をさるる身掻き花見を後持小
お蓋し何るのりて呼止む速く安んといれさけが小を郎笑ていりさけの
用のれがこそ呼とあされ深く不審とすあめらにせしき今日それるは花見
我隠家か小尋ね承りて殿を慕へる如く不図姫と恋争ひ姫を妬くあめら
ゆまの殿主人怨をもちてその口よりと鎌倉へ上ると言置り走り出

其まふふらぶとさかえんや。得失を説く為き。今此中村のたり。いふ花見も
父も人君もあつた顔。このてんまの此中村は。ううとこと。鎌倉殿へまゐる
望と果し。もうどいて。ひかりのたふ害まじ。爾は。ちんごが。暮がく。あ。と。想ふ
我殿は。再び。還念。と。絶て。ううと。ううと。此道理を。思惟して。ううと。さして
あ。ためて。我家。中。も。て。姫。り。とも。殿。は。は。へ。め。り。した。た。之。姫。の。公。解。を。獲
悪き。平。宣。も。も。其。か。く。止。め。ら。う。ら。の。悪。き。ぬ。ぬ。な。じ。け。じ。前。刺。姫。と。の
争ひ。た。一。時。の。意。意。地。の。互。に。仇。と。な。れ。ま。ら。う。じ。爾。は。う。う。と。や。と。や
の。か。と。い。と。答。え。は。泣。き。見。万。平。か。え。と。さ。み。み。出。候。り。く。と。想。ひ。し。ふ。及。び。も。つ。ね
あ。こ。う。ね。汝。い。く。み。欺。く。とも。花。見。次。俱。ひ。行。入。と。い。彼。後。候。が。水。の。月。迎。も
け。ね。と。か。ね。が。思。ひ。明。ら。も。く。ま。ね。若。踏。踏。て。進。く。さ。ら。ら。後。悔。と。体
し。ま。あ。と。飽。ま。て。敷。に。罵。り。つ。美。登。が。油。を。窺。ひ。て。腰。に。佩。り。給
一刀。抜。も。も。え。せ。ご。切。付。せ。り。又。の。光。お。小。を。即。ち。舞。ま。さ。さ。り。刀。持
と。れ。万。平。が。腕。ち。ん。て。から。と。投。足。下。に。踏。ま。て。い。き。ま。れ。は。初。り。て。ま。あ。ふ
言語。を。和。め。道。理。を。説。諭。せ。とも。耻。づ。け。と。此。奉。勅。小。及。と。様。道。理。の
白。痴。が。今。い。う。く。免。され。と。既。に。切。入。と。な。れ。所。踏。ま。す。足。の。ゆ。あ。り。成
万。平。は。う。と。才。を。脱。き。逃。走。し。んと。志。し。し。仕。候。じ。たり。と。小。を。即。ち。逃。走
中。と。追。追。る。小。忽。ち。途。を。失。ひ。く。前。より。川。へ。指。こ。え。り。小。を。即。ち。念。念。と。之
ぞ。も。早。に。流。の。流。き。流。せ。し。と。有。ま。れ。る。再。び。生。る。も。あ。ら。ま。れ。ば。之。度
は。く。急。見。に。對。し。今。平。年。聽。つ。る。が。我。本。と。も。に。尋。ね。ば。あ。ら。ま。れ。る。か。ら。う。が
不。便。が。う。も。万。平。が。例。あ。せ。ん。と。威。せ。とも。何。と。も。回。意。に。語。う。さ。し。傍。へ
三。層。より。三。層。此。南。村。中。万。長。が。妻。の。小。毎。り。つ。る。女。児。の。小。栗。が。跡。を。慕。ひ。出。く
ゆ。り。身。さ。う。小。氣。づ。く。に。しく。何。處。と。それ。と。舟。を。縁。と。足。の。赴。く。ま。う。ふ。て。此。所。小

川原の巻之二



花兒

小鉦



万平

小太郎

阿比川小兩夫

源雄と

あらま

小栗卷之六

娘の女児が祟の仇なり。且汝万平を害せしと父がいふ。怨を重し。如何がれ
 害心を抱くも知るがら。是彼ありか。速に此地方を去退せ。赤坂の這方ある。
 娘も美登も実爾りと主従三人俄に陸奥の里を去退して赤坂の這方ある。
 糸貫川といふ地方に移住たり。却説這裡より万長が妻の小毎美登を別れ
 女児を懐いて懐ひ急ぎ我亦よ還るが主の長の女児が人ごいひめり。心も公
 り。いといはとう案ぶ煩ひ。只今妻が女児を懐いて還る事は。かまはざ
 なく喜ひ。悔りのことと言語する。まら涙のこぼる。深しぬ。その時小毎はま
 對ひ阿蘇川まで小を舟にお出會。云々へはる。且女児を恙なく戻せし
 こと詳し。父えさしてやま。熱く小栗が光景を窺ふ。尋常の人と
 けふおあやも後の必と奈達く。時めく。のべ。おん。奈何おあやとせし
 るの奴家か。心よ。今彼人を難面。此正とまじし。もさる。女児が懐らふ。

といふ足本を思ひめぐ。其今まで。も尚さら。因我と。自ら。後
 後福を仍て。と。女児を疎畧せ。熱く思ひ。と。父は。万
 万長が。野村。沈思。居。し。が。あ。ら。首。と。を。わ。ら。ち。や。我。父。小。栗。助。重。を
 後。倉。敷。の。山。地。氣。で。夢。の。り。入。中。て。東。國。の。住。な。ら。び。と。く。此。亦。ら
 邊。まで。左。遷。身。は。る。ほ。の。者。い。と。奈。達。秋。あ。く。前。日。の。女。児。の。思。漢。よ
 胸。め。れ。と。救。され。恩。我。相。ひ。女。婿。と。し。よ。ま。く。心。を。そ。し。小。栗。が
 女。を。議。し。を。嫁。し。と。思。は。と。女。児。と。捨。て。照。天。と。盗。と。竈。と。外。お
 忍。じ。お。き。彼。而。通。ふ。何。ゆ。ぞ。且。其。人。が。我。主。官。万。平。小。栗。が。女。子
 お。殺。され。と。あ。れ。し。の。必。彼。が。命。を。と。す。是。や。恩。を。思。ひ。も。せ。と。禽。獸。と
 だ。も。劣。し。心。の。人。い。く。む。の。信。を。ほ。し。義。と。あ。と。も。世。の。誘。の。穂。お。打
 ち。ま。さ。る。も。逢。裁。が。拜。殺。せ。し。く。は。本。に。達。入。り。お。く。に。小。栗。が

心と虎狼と毒も女兒も今日より志意を改め。あつく想ひ断れ。あな恐怖き人々を。よひの外の夫は言再いし。人々も好く。さし傍に居りし母もあつて云出はる。宜くと。み承りて道理申す。あなめ。おは。奴も熟く思惟。ゆめ小栗が照天と思ひて。折く通。親への許し。さら。妻あつた。足指糖を乗するの信。心より。かき。平ら。わ。多。く。悪。く。も。は。ら。ぶ。か。む。り。あ。と。と。弁。は。れ。の。思。を。仇。に。報。ひ。ま。し。司。馬。長。郷。と。女。へ。一。を。定。隙。を。鑿。く。お。く。故。郷。に。錦。を。飾。け。文。君。を。妻。に。して。生。涯。乗。り。唐。土。の。口。書。も。も。え。ん。け。る。小。栗。が。戈。の。長。郷。に。勝。り。か。ま。と。も。劣。は。ま。し。西。復。水。の。舟。も。ま。ま。ら。ぬ。後。悔。を。し。ち。ま。ひ。そ。と。言。語。を。受。り。理。と。日。あ。て。再。再。四。計。也。から。妻。の。言。語。の。道。理。あ。ら。お。且。と。女。兒。が。身。と。氣。を。ひ。怒。の。心。を。翻。え。し。凍。み。ま。り。し。助。重。と。再。い。我。家。に。迎。ひ。し。り。照。天。は。久。く。便。き。は。ら。ぶ。く。と。阿。比。呂。川。に

そりし。其家。を。う。り。あり。お。く。い。と。ま。の。居。を。あ。り。し。ら。空。へ。く。と。た。ち。還。り。斯。と。告。げ。女。長。丈。母。の。業。を。相。違。下。呆。れ。り。花。見。の。此。す。ゆ。く。よ。り。も。且。不。服。を。且。と。泣。涙。の。中。に。想。ふ。や。あ。れ。の。照。天。の。如。く。お。う。殿。と。奴。の。妹。背。を。斬。り。思。ふ。を。ら。動。き。お。り。し。は。ら。ぬ。又。我。殿。も。笑。へ。ば。ぬ。あ。ぢ。れ。お。き。拳。動。り。ぬ。照。天。は。も。奴。家。の。方。も。契。り。の。お。や。間。を。侍。と。照。天。が。色。香。を。愛。む。ひ。此。方。の。秋。の。角。と。し。う。り。捨。あ。つ。を。怨。り。あり。昨日。も。今日。も。優。恤。と。お。ひ。い。人。が。が。ら。今。つ。あ。り。し。憎。し。う。や。何。不。み。忍。ぶ。も。我。一。念。の。思。鬼。とも。蛇。も。も。た。り。此。恨。を。暗。に。ぞ。や。お。く。べ。き。と。心。毒。の。心。火。お。胸。を。焦。し。物。狂。り。く。嘆。き。が。遂。に。病。と。なり。あ。ら。も。是。より。し。て。何。事。も。き。が。悔。し。と。聞。小。而。已。し。病。疾。の。存。り。父。母。あ。ら。も。相。成。る。事。を。厭。ひ。が。后。母。の。服。さ。ぶ。小。倉。の。氏。ゆ。り。き。病。疾。め。ら。り。と。え。ど。嫉。妬。の。目。も。ふ。り。や。ま。り。て。昔。の。心。を。暗。ん

小夜更人の病と付養母即と忍び出庭の池あり身を浸し。と恐怖も昔
中にあるとありゆは荒神み。祈撫とかけやもや。夫神明の善か福一悪も禍
たまふとゆく。此平。虚ゆらむ。奴家か願する。と。急怒納受まう。また。奴家
小栗丹配遇せし。他一心を拵む。貞と守つ。仕。と。照天のいふ。婦女も夫
床をれぬ。仰ぎ。怨り。不義非道と。照天命と縮ま。あひ我此を念
と。時けあへ。あ。此。死。一。接。着。沈。之。幾。許。の。苦。難。を。受。る。も。聊。感。ひ
ゆ。じ。と。丹。誠。を。凝。り。祈。り。万。長。夫。婦。の。祈。り。知。る。を。女。児。の。病。疾。小。栗。が
行。来。知。れ。ざ。る。と。ぞ。ひ。屈。く。の。の。ち。な。り。と。只。顧。小。栗。が。去。向。を。索。り。却。説
這。裡。ゆ。小。栗。を。從。床。差。の。里。と。立。退。糸。貫。川。移。住。密。鑊。倉。の。光。景。以
窺。小。高。い。ま。と。仇。と。討。の。便。宜。あ。り。祈。り。此。ゆ。小。栗。一。光。陰。を。送。り。た。り。ぬ。
時。と。秋。の。あ。り。ゆ。り。一。夜。あ。る。を。信。じ。て。と。と。と。林。に。し。よ。愁。み。た。り。も。秋。の
悲。し。き。あ。ら。ひ。か。る。小。栗。夫。婦。の。昔。目。如。夜。才。油。有。り。と。流。者。乃。お
あ。形。も。家。と。父。と。死。亡。し。今。零。落。て。た。く。し。く。ま。り。ぬ。が。ち。の。た。と。ま。ひ。
場。へ。送。る。光。陰。も。穿。く。過。り。の。耐。休。を。報。ひ。ん。も。な。れ。才。の。壽。命。を。嘆
け。夫。婦。を。流。の。の。ひ。思。つ。と。時。を。さ。や。と。秋。の。夜。い。と。う。更。園。く。丑
満。比。と。思。ふ。耐。一。陣。の。風。吹。落。て。板。を。は。と。ふ。村。西。の。音。さ。と。と。く。ま。え。一。か。は
何。と。お。お。物。哀。く。ま。れ。も。あ。ら。で。身。の。毛。さ。ら。迎。え。ら。う。時。と。あ。れ。油。の
早。く。燈。火。の。消。え。ん。と。と。又。明。き。火。彩。と。さ。し。傍。を。見。れ。ば。長。れ。馬。交。り。や
私。色。昔。中。う。る。れ。小。女。子。が。教。俯。け。て。ま。さ。り。け。て。夫。婦。怪。し。着。一。着。ふ。こ。ん
そ。も。奈。何。の。花。児。さ。り。照。天。の。こ。ろ。の。氣。も。消。て。あ。る。や。と。さ。り。の。い。ひ。さ。り。と。
夜。の。睡。寝。を。し。き。被。死。臥。是。は。く。戦。く。居。小。栗。の。声。と。励。し。ゆ。奈。何。の。故
を。り。と。お。お。の。お。も。只。ま。へ。夜。更。で。あ。ら。め。り。う。事。は。る。縁。故。を。語。れ。い。れ。た。け。ば

小栗丹配

七

回廊へかゝりてさめぐと恨みのげふ嘆きはけ涙とさりおまわりの去はよと
さへたのるく照天と目づけ花かたれを小栗もりやと枕辺にたてられ刀を
みるよりもいと云はし抜討せよと斬きの愕然と夫婦假寐の爰礎て
軒端に近れ表の裡も只勝の声のじ寂寥として枕良し小栗も照天も
かへえ合し影射を控もさりしが互小怪し畏りかく夢のまうと泣のめあ
二人揃しえなればいよく不審望の朝小を即を招れ昨夜の爰爰いひ入
蜜は青墓もやうく花児が翁を窺ふのよ忽ち還りすめてやと命を
うひく彼西もまわり近れ辺の表もてあつた殿ふつれ早あせせくよ
翌夜となく泣めり遂に重た病ふかて昨夜没命とくはしやめ行お忍びく
万長が家裡を何れも傍尼の出入をせりひしめく奥まりとほ方あ念は
証の声のさへへはしむる必定失のこそとなき彼没命のまうつ妨さつめは

殿も咫尺せよのあわれ彼がむをさひすお便おくもさす懐ふこそと目と泪の
とせしめられ小栗も笑てまねをそ呼ぶ方えくも執念のひくよ迷ひく亡魂の
昨夜らまてすおふけるいと迷擾やと云はし念佛を唱へたり照天姫も小太郎
頼るとさく存もきり暫時仮も主なりと頼じ人あつた夫の枕は伽
せしとさ入めりお目前良人の翁を窺ふまに持てるりの森あられぬくこめれ
と流るるる男子のこおめりまはし難くしたまぬの作紙いも人目と取て言語
形く姓名をさると心裡奈何ゆらんとは彼を思ひまをさへはらとやと泣涙あれ
これ伏せびくと嘆きられ小を帯座を厨あててさくいひお親身も殿と嘆きのふ
ふまおいひささうお不えんも嘆うせまを心と紙紙がさうのほを弱くして
其虚をうかひ狐狸悪魔妖出をみんも知るるは確ししたるうた
嗚呼甲斐おと流しはる小栗も言語を正しうおねた妻の嘆うる天と共お

戴る仇と頼ゆる牙とりちて。さるる心弱くその宿志と逐く、是れ本形。
 公雄はくお多くと励まれて照天舞臺もと公よりまかせと尚も先見の死を
 憐れ。せめて未事を助ると守幸まの祝音のまらもらむとその外の伝
 香花一読経し只願後世の冥福と祈ることを殊勝なれか。さるる後あり
 先見の怨も失けりや再び怪しむこともなく一月あきもさるる不在詠下
 再洗美登小助へ小栗の命と禀とる。一に左廂へ下りたり。瑞で主命を
 願望し身をましくお賃ゆる。池の庄司と始め後を風間加藤おの命と
 捜索で主命を信う。此們をそ世甲斐ありてふ力同意のりのとま
 流しひけりや。あまら一色と先年小栗主従後汲さふおめて落命とつと
 流しと信とありひ今の戒心するていも。近日下総の正領と下はよりとせしう。
 早く主君を呼下しふ力の筆と書し。不意と登起と一色と討とんと流る

夫婦
 相見



湯へ乾きまく思へど替んとされ柴もなぐ。湯付踏躑居るふ。年祀
十二ともやわりのねとおほゆ了髪あつらひのよふ文箱ふんどしと持もちつるうろ。二人兼あつらひの方
より歩みまきまが小栗不審しんぱんとあやう。夜もや二更とむかひたよ。いふに
ひのぞく人として此山中へまきまきた。これや藤ふじてや及およぶ此山この山の彼地獄あつらひ
墮落おろせし幽魂あやうのつら。何年ととらんと馬うまを留とどめて中なかかめ了髪
近寄ちかり小栗お對たいひ云々のたはら。奴やつの彼方あつらひなは家いえ。まきまきとれこの
なるが今夜主の命あつらひより藤ふじふまわりのひはるが。途中ちゆうちゆうで雨あめの愆あやまされて
便べんしくぬくまへ後あとといと辛からくして御ごやふ。此この山やままで歸かへりまはれども。か
山踏やまの恐おそろく歩あむ愆あやまひふ宜よろ所ところめて不ふ意い達たつすのむじする様ようと。あられ
送りなまらせやと。理りかみまきとめれば小栗怪こりしく思おもへども弱よわくはな
悪わるくとも心こころよび小諾こたひら。望のぞみまはしはらん。導あつらひ引ひせよと前まへまを馬うまと静しずめり

後背あより行ゆく後あ二丁にちやうをりして一坐いっざの林のりんの下したに到いたりぬ其その所ところに松まつ多おほく
いふ此林このりんの裡うちなる家いえこそ主まの家いえを信まん。さうさ送り終おひら思おもひを報かひ
とくくきふ。ま入まり多おほく湯ゆは衣きぬを乾ぬく。ま入まり多おほく湯ゆは衣きぬを乾ぬく。ま入まり多おほく湯ゆは衣きぬを乾ぬく。
怒おころく。此小女こをんなとある妖ま魔まと思おもひに。此この山やままでまつれと何なにの怪あやみまはし。
白しろ使つか使つか林のりんの徒た役やく使つかすふ。ありのあつらひの必かなず道みちの人ひと母はははるるりな。
何なにとれとより還かへる臆おそく。これと似にらる。何なに程ほどのさうあるべし其その実まこと否やを乳ち。
且かつき雨あめの湯ゆ。衣きぬを乾ぬめと言こと語ごを和なめ。さうさゆけん宜よろふまきし。湯ゆ付
休やすみ。その内うちに湯ゆ。衣きぬを乾ぬめ。此この山やままでまつれと何なにの怪あやみまはし。
遮あひ。湯ゆ付ゆけ此この山やままでまつれと何なにの怪あやみまはし。
おのれら真まことまきまき走はりぬ。小栗こりの馬うまより下くだり。其その山やまの林のりんに松まつ多おほく。
坐ますかんとさう尋たず常じょうとらる。さうの由よしある人の世よを逃にれ此山里このやまに。

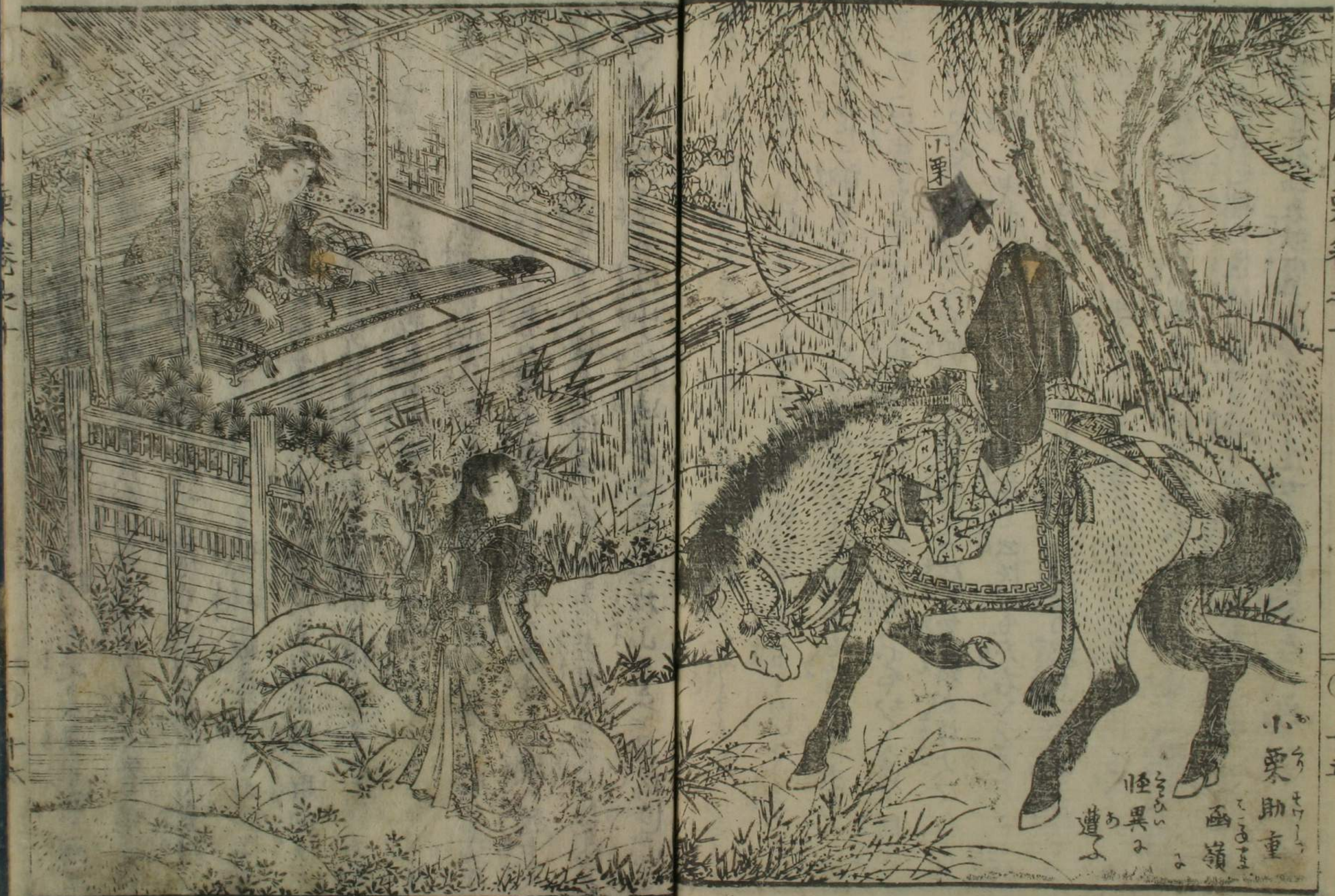
住母や、しつゝある人あそむる中ら入其名ゆいしと思ふら前ので、
今も主山安へ上りしに、さく世裡に出入りて休む人多く、小栗もさうこ
し、
不格好ゆ、借られ一室うす、変入りぬ、
奈何人、まゝ在まゝと、何了、
笑、
素志ありんと、いひはして、
怪しみ思ふ、
親心なく、
遭ひ、
いふ、
小栗、

一、
か、
足、
床、
白、
月、
靈、
醉、
嗚、
動、
此、

此教待よ遭ふこと感謝と述ぶるは是れ其の意に急ぐ旅路もなればや
出ぬかゝり今夜のれを待て駕くトとまんとま出んとまを傍りのりた女
慌忙と袖ひきとめてやしやうのうふ急じしる旅なりともとやと更こと
おほあなりさうな夜道の物憂りのとまお此処の山とまとて猛獸
鬼魅の襲行踏ふ居るととて旅人のさらし古地お居るりのとても終く
今夜お行りのほいおまの叶いごととも今夜の此家お止宿多人と云はるの目
の芳志赤くは付れい此山中の光景を知り通る一人旅奈何奇怪と書る
そよの輝霞ゆいといはるまもまんとておれを只願止めて飲まれば小栗少く
娘を悲しとてやまておれをわあわあ孫と某今夜けお宿りまれば縁故お告
知ししやとてお苦より寝るお斯るお度手なる家お女性ののみ行るあこと
いと心をほきま某折お惠お非お此お宿多人と世の流儀も口惜ゆるとて
辞をばるごとくお女おらら悲お宣つとて道行るお既お最およお此おお
はららりあつて良財を移しまのりもや只今去まやも五十歩百歩おはら
とやいして誹謗と免とまらん今夜の是非お止宿多人小栗の物云さぬのとて
悪く言語を中てまのりお知らぬ前とて危まれ角まれ今既お知らら
いと此おお居るお此お人お知らぬとも君子の眞のるお節を失らると
やとておばららぬお条お止のるおと袖を拂くまよとて主の女房お面お揚げお客
おららと辞おひとよおんお此おお拵くと過世の契おわらなりお奴家おん
忘れおやと云おおせお熱とておれお不思議やまらお今世を去りお見
那らとてお奈何と愕然とりのお恨やの我殿お照天姫の輝おはけお
おつおとてお野の草お拵くおなりのお妹お春のおつくお昔の情お今
おのほしお思お胸お苦くお涙の淵お沈しお終おと重きお酒おとたのり

我日ものぶがねふいとそりも世と去りて死生の旅路ふり行ど公々
 今世止まりて浮きもゆらね悲しきまされも思ふ念力の今月を夜叶ひ
 殿と此所へひきはしる今より奴家とりあとも冥府へ入りあやと
 小栗の結ぶ取ふり流海なりて怨とわが助重前刺よりまを又だ双眼
 閑居よりか果て後目と閑に嗚呼浅猿花兒よの照天の妻より
 親の許嫁せし我妻なり。そこの縁の仮初は結びも果ね間をけしを
 弁へさうくふ照天姫を嫁す。思ひをりて我と才と失ひはるここと
 鈍し思ふのりたれくものも。死してふいとも明けしを傳へつるこある今云
 へる道理をよく聞きたく迷ひを暗し。成佛得脱せよけし。云は花兒の
 款より上怨めしちあゆらえり。照天姫もあちの縁しを得は
 縁ゆらら。奴家も同し半なるふ。女をぬしを宣めせ。せへふ処見ら

奴志がいの壁言う。只今殿を闇王の廳へ借ひ此をを明きうさるる
 と。手とり伴ひ行人とと小栗その手と振放ち。最苦よりしるまぐくふ
 言語とそし諭せども聴かぬ愚人。お我もさゆき宿志あり。汝
 奈何し妖祟ととも。忠孝義膽の利刀とて。切拂へてやおくる鬼と。腰刀を
 抜きもいせと。さう向うけて斬はくわ。若見か。姿か。忽然と。燈火なんど
 消え。跡も残さど失おる。小栗を念と云はるも。左右をさるる。さあ何
 今まこのけり待女ホ家居もとも。海と。霜の軽白にゆめく。消ての
 跡も破れと。古辻堂の裡に。さるる。夢に心地へ。呆然として居りし。か
 此財我既し。明人とし。山端ち。わが。は。は。は。心已し。帰し。思惟は。惜
 前の夜も。亡魂の糸。許す。憶ま。今ま。斯く。奇怪。運。渾足
 申。斐る。さ。公。ゆ。あ。妖。魔。の。乃。く。慢。は。女。も。尚。劣。ま。り。と。我。と。已。と。恥。ひ。



小栗助重
 函嶺
 怪異子
 遭ふ

只願斬愧つと尚何朝霧晴る山の下方何とも定る舟とみど四五
十人の一群々這裡とじてありしを。公のひびきと伸より。熟く着るべきの
扮打山賊めきつる光景也。公怒られて悪うと走らんとして鬼研と
捜索ありし中二十歩彼方なる一村立てる林に藪を踏みぬぐりしを
公はひ走りて慌忙くうちあつるを傾け馳去んとするに彼一群間近く
寄り差の裡より透しよる。横山安秀が山賊ホと俱してあつてあつて
けり。小栗これとて此者賊ホホ夫奴が仇なれば。此地に遇てあつて
なると思ひしが又思ふや我の色とり大敵ありとて討する前を我は
形も糸をひきと寡の衆に敵せんと。今我の單騎を彼に數十人
を従へ。戦く過失の悔も詮らるべし。何れ老賊にえはらむと
笑と傾け馬を早め横山と行遠めてここをば横山とて目送りしを
不審なるありしを左右と願只今此正とて去り旅人となりしは馬に我少く
面深ありこれホある旅人。不審なれば。笛めよと下知されぬと山賊の
声もやよ旅人云。きこありしと止り種と呼は。後背より追々や後ねく
山城もこれとるより縁故の知れぬと小栗が馬前を渡りて脱し。世に止め
たり。小栗これを聞きしを。鞭と揚馬を躍らせ對ひし。山賊もホホ
かれ。名を負ふ鬼駢荒也。鼻息をた踏む。極り怒り又對をば
人を嚙と蹴倒し。從撲まことねひ走らん。山城とも恐怖とて近きり
ありけり。横山安秀首より。此光景を窺ひ見此馬にこれ鬼駢なり。去る年
小栗云。后その行跡を知りし。公今此処まで足とる。今馬を
旅人に死せしめ。仍りて小栗をわらん。とら入爾めれば。我はゆき仇あり。今
除く。その後たる害ゆらん。と下を勵はし。嗚呼云。甲斐のまのものをかた

さふのまらららりて。射るるるる。下知され。後まをり。山城も是れ
中く力を好縁。腰辺巾佩。半弓をりて取囲。故くふて射る
るは。まも馬も猛。とんと。西より。襲た。前先の敵對。すも。あふ。た。あ。ま
戦と好ま。され。一道の生路。を求め。走り。忽ち。狭き。谷間。も。あ。り。此。至。て
賊も。追。つ。た。り。た。れ。此。亦。あり。て。麓。も。出。り。と。馬。と。歩。せ。行。は。前。途。大。き
す。な。れ。池。の。り。て。中。溜。と。煙。を。沸。上。る。音。谷。神。の。響。言。正。人。の。泣。海。が
声。不。防。律。さ。り。小。栗。これ。を。ら。ん。此。山。は。温。泉。の。目。を。き。り。め。て。硫。黄。を。あ。ら。ん。
爾。れ。此。水。中。も。硫。黄。あ。り。て。常。に。燒。ゆ。る。を。り。て。水。自。ら。熱。湯。と。な。れ。る。ま。ん。
世。昔。より。此。山。は。焦。熱。地。獄。の。り。と。な。り。と。これ。ら。の。こ。と。を。云。う。と。ん。と。踏。踏。地。
ふ。猛。然。と。側。に。高。き。岩。上。より。走。雷。の。こ。と。を。響。言。と。て。煙。を。上。り。熱。湯。俄。に
沸。ゆ。り。鬼。研。と。れ。ま。り。た。花。あ。り。一。散。巾。池。中。に。奈。何。と。う。踏。換。え。ん。熱。湯。の

池。も。花。と。ん。り。小。栗。の。り。と。手。綱。と。裸。り。その。岩。の上。に。躍。揚。り。し。ま。ま。る
ご。の。の。熱。湯。も。勢。射。も。入。り。こ。な。れ。馬。も。身。も。皮。破。れ。肉。爛。痛。む。が。ら。い
少。の。動。く。と。危。う。と。小。栗。心。猛。し。り。と。今。の。ゆ。も。泣。き。入。り。日。は。何。と。ん
祝。き。ふ。今。日。の。難。と。救。せ。ま。と。心。中。の。念。は。け。鬼。研。の。對。ひ。て。ま。り。た。り。海。ま
世。の。類。ひ。な。れ。名。も。あ。れ。今。い。と。と。耻。し。け。よ。今。日。不。意。此。跡。に。遇。て。命。の。危
さ。断。死。も。せ。徒。死。中。に。汚。名。を。承。く。残。さ。し。い。う。ま。を。念。の。ゆ。か。ん。と。昔
劉。先。主。の。的。盧。馬。の。至。と。助。け。て。芳。名。今。身。著。し。汝。死。を。辞。せ。と。我。を。救。て。入。里。
出。さ。ば。周。軍。の。射。至。る。馬。に。祝。音。と。生。れ。美。泉。を。見。う。し。め。今。世。の。美。を。輝
ま。ま。と。人。の。對。ひ。て。言。ま。す。と。孰。と。と。入。り。實。も。た。ま。の。の。こ。な。れ。此。言。を
能。く。え。ん。死。ぬ。へ。う。え。く。鬼。研。の。俄。然。と。て。勢。と。生。じ。鞍。を。加。さ。る。ふ。踏。換。り。
矢。を。射。る。が。ら。池。邊。を。が。サ。丁。を。う。り。而。て。勢。を。か。ら。し。倒。れ。て。死。て。り。是。則。此。亦。

小栗外傳卷之十畢

北郎芳

昔山の裡ある芦の湯場とて人家ある処に小栗の馬より下て鬼押の忠死を
感激しそら涙を流ゆる。此上なるの忠義とて下はせとて人々を
鬼押の屍を収檢す。その上我身の傷と治癒せざる。家ある方へ往りしれど
まふはたつとていふおせんときお死に違ふ對ひし市女を娶ひて女の一人の
淨子復しつゝが這裡をきて歩みまれば是より幸と此人を養ひて人々を
むやむやと抑小栗などの者流をわらひ此期に逢ひ。そそと傷癒は
し何正は花見が怨念の祟あるにあらざらん。此後何れも有。又今此正
ある一人の們これゆゑの人を足等のものに往りて解を續け知多分

製水處

南心齋橋通北久寶寺町

山野目十八番地

前川源七郎

